

6 3 6 1 - 5 7 2
平成 2 0 年 4 月 2 5 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 号について

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 号を発表したので送付します。

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	葉いもち	並	2
	イネミズゾウムシ	並	2
	スクミリンゴガイ	やや少	2
冬春きゅうり (半促成)	べと病	やや少	2
	うどんこ病	並	2
	褐斑病	並	2
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
	タバココナジナミ類	やや多	3
冬春ピーマン	うどんこ病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	多	3
	タバココナジラミ類	前年と同程度	3
	黒枯病	前年より多い	3
冬春トマト	灰色かび病	多	4
	葉かび病	並	4
	タバココナジラミ類	多	4
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	多	4
野菜・工芸作物全般	アブラムシ類	やや多	4
	ハスモンヨトウ	並	4
かんきつ	そうか病	並	5
	かいよう病	やや多	5
	灰色かび病	並	5
	ミカンハダニ	並	5
果樹共通	カメムシ類		5
茶	炭疽病	並	5
	カンザワハダニ	やや少	5
	チャノコカクモンハマキ	並	6
	チャハマキ	並	6
	チャノホソガ	やや多	6
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	6
	チャノキイロアザミウマ	多	6
	ツマゲロアオカスミカメ	多	6
	クワシロカイガラムシ	多	6

作物の生育状況(4月中旬)

早期水稲は、一部の地域で4月上旬の強風により葉先の傷みが見られ、生育が遅れたが回復傾向にある。冬春きゅうり・冬春ピーマン・冬春トマトは収穫期。茶は萌芽期～発芽展開期。かんきつは新梢伸長期であるが、生育が1週間程度遅れていた。

5月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、気温は平年より高い、降水量は平年並と予想されている。
(3か月予報 鹿児島地方気象台 4 / 24 発表)

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1 葉いもち（並）

[予報の根拠]

1) 天気は数日の周期で変わり、気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 補植用の取り置き苗は、葉いもちが発生しやすく伝染源になるので、補植が終わったら速やかに処分する。
- 2) 曇雨天が続く場合はあらかじめ粒剤を施用するか、または葉いもちの早期発見に努め、病斑が認められたら直ちに粉剤または液剤で防除する。
- 3) 同一系統の薬剤の連用は、薬剤耐性菌が発生しやすいので避ける。

2 イネミズゾウムシ（並）

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率26.3%（平年40.0%）は平年よりやや少、被害度1.4（平年4.5）は平年より少である。

2) 天気は数日の周期で変わり、気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 成虫が10株当たり5頭以上のほ場では、粒剤の水面施用を行う。水面施用に当たっては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流しや落水はしない。

3 スクミリンゴガイ（やや少）

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率0.0%（平年14.0%）、 m^2 当たり貝数0.0頭（平年0.7頭）はいずれも平年より少である。

[防除上の注意]

- 1) 水田の入排水口には金網を張り、貝の侵入を防止する。
- 2) 貝の生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施用を行う。
- 3) 粒剤の水面施用に際しては水管理に十分注意し、水深が3cm程度になるように調整し、少なくとも4日間はかけ流し、落水はしない。

冬春きゅうり（半促成）

1 べと病（やや少）

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率40.0%（平年67.3%）は平年よりやや少、発病葉率0.6%（平年14.28%）は平年より少である。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、高温多湿にならないように注意する。
- 2) 肥料切れや成り疲れによる草勢の衰えは発生を助長するので、適切な肥培管理に努める。

2 うどんこ病（並）

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率60.0%（平年23.6%）は平年より多、発病葉率4.4%（平年3.3%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 整枝・誘引・老化葉の摘葉等を行い、採光・通風を良くする。
- 2) 耐性菌の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。

3 褐斑病（並）

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率40.0%（平年31.5%）、発病葉率2.6%（平年3.6%）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

4 ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率0.0% (平年14.5%)、1葉あたり成虫数0.1頭 (平年0.2頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 本虫は薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤を輪番で使用する。
- 2) 収穫の終わった発生ハウスは蒸し込み等により本虫を死滅させ、周囲への拡散防止や次期作への発生源を絶つよう努める。

5 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ ハイオタイブQ) (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率20.0% (平年22.8%) は平年並、100葉当たり虫数1.4頭 (平年0.6頭) は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

冬春トマトを参照 (4 ページ)

冬春ピ - マン

1 うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率53.3% (平年53.8%)、発病葉率6.2% (平年8.1%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥しすぎないように注意する。
- 2) 適切な肥培管理を行い、また、茎葉が過繁茂にならないように整枝を行い、発病葉は除去する。
- 3) 収穫終了後は、ハウスを密封して病葉上の病原菌を高温で死滅させるか、また、病葉残渣を持ち出して処分し、次期作への伝染源を絶つ。

2 ミナミキイロアザミウマ (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率66.7% (平年39.0%)、10花当たり虫数3.5頭 (平年1.4頭) はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

冬春きゅうりを参照 (3 ページ)

3 タバココナジラミ類 (タバココナジラミ ハイオタイブQ) (前年と同程度)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率は6.7% (前年15.4%)、100葉当たり虫数は0.1頭 (前年0.9頭) である。

[防除上の注意]

冬春トマトを参照 (4 ページ)

5. 黒枯病 (前年より多い)

- 1) 4月中旬の発生面積率は33.4% (前年23.1%)、発病葉率は3.4% (前年1.0%) である。

[防除上の注意]

- 1) 葉での発生が少なくても、茎部や果梗部、果実表面で発生がみられることがあるので警戒が必要である。
- 2) 高温、多湿条件で発生しやすいので換気等に注意し、早期発見に努める。
- 3) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、発病を確認したら早めに防除する。

冬春トマト

1 灰色かび病 (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率66.6%(平成23.0%)は平成より多、発病果率3.4%(平成1.5%)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

2 葉かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率25.0%(平成23.1%)、発病葉率8.3%(平成6.2%)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

3 タバココナジラミ類(タバココナジラミ バイオタイプQ) (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率50.0%(平成9.8%)は平成より多、100葉当たり虫数3.7頭(平成1.7頭)は平成よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 気温の上昇とともに活動が高まるので早期発見に努める。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- 3) 収穫の終わった発生ハウスは蒸し込み等により本虫を死滅させ、周囲への拡散防止や次期作への発生源を絶つよう努める。
- 4) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 5) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、より一層ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低いポタニガードES等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミ類を物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

4 トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 栽培終了後はタバココナジラミ類を防除後に株を抜き取り、10日間程度施設を密閉して本虫を死滅させた後、残さを処分する。
- 3) ハウスの周辺雑草は休閑期のタバココナジラミ類の生息場所となり、次作への伝染源となるので除草を徹底する。また、ほ場周辺に持ち出したトマト残さ及び野良生えのトマト等には特に注意する。

野菜、工芸作物全般

1 アブラムシ類 (やや多)

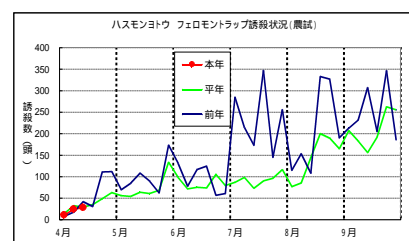
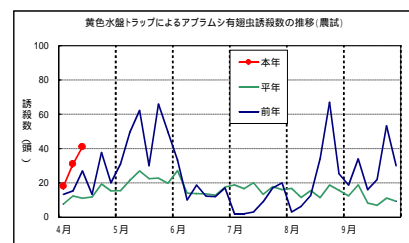
[予報の根拠]

- 1) 黄色水盤トラップによる有翅虫誘殺数(佐土原町)は、平成より多い。

2 ハスモンヨトウ (並)

[予報の根拠]

- 1) フェロモントラップによる誘殺数(西都市、都城市、国富町)は、平成並である。



かんきつ

1 そうか病（並）

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生面積率5.0%（平年1.9%）、発病葉率0.3%（平年0.1%）はいずれも平年並である。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は萌芽期・落弁期・幼果期である。

2 かいよう病（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 3月中旬の越冬葉調査では、発生面積率40.0%（平年21.3%）、発病葉率4.9%（平年2.6%）はいずれも平年よりやや多である。
- 2) 4月中旬の新葉調査では、発生を認めていない。
- 3) 5月の降水量は平年並と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は開花直前、落花後、梅雨期、秋芽生育期である。

3 灰色かび病

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は落弁期～幼果期である
- 2) 幼果表面に付着した発病花卉から幼果に伝染するので、枝をゆするなどしてできるだけ花卉の離脱を促す。

4 ミカンハダニ（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率40.0%（平年28.2%）は平年よりやや多、寄生葉率4.1%（平年6.5%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%（1葉当たり虫数0.5～1頭）を目安に防除を行う。

果樹共通

1 カメムシ類

[防除上の注意]

- 1) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動する。ウメやモモなどの結実中の果樹類では飛来に注意し、初期防除を徹底する。

茶

1 炭疽病（並）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率23.1%（平年30.1%）、 m^2 当たり病葉（旧葉）数1.1葉（平年1.1葉）はいずれも平年並である。
- 2) 5月の降水量は平年並と予想されている。

2 カンザワハダニ（やや少）

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率23.1%（平年45.8%）、寄生葉率1.2%（平年5.9

%)はいずれも平年よりやや少である。

[防除上の注意]

- 1) 同一薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤の口 - テ - ション散布を実施する。
- 2) 合ピレ剤の春季使用はリサ - ジェンスが発生しやすいので注意する。

3 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 顆粒病ウイルスによる防除適期は、第1世代に対しては越冬世代の発蛾最盛期の17日後、第2世代に対しては第1世代の発蛾最盛期の10日後である。
- 3) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

4 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月3～4半旬頃が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

5 チャノホソガ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていないが、フェロモントラップによる誘殺数は過去5年間で最も多い。

[防除上の注意]

- 1) フェロモントラップによる誘殺状況では、都城では4月2～3半旬頃が発蛾最盛期であったと考えられる。
- 2) 本年は防除適期が一番茶の時期と重なり、適期防除が困難であると考えられるので第2世代以降に重点的に防除する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の巡回調査では発生を認めていない。

[防除上の注意]

- 1) 例年、二番茶期から発生が増えてくるので注意する。

7 チャノキイロアザミウマ (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率69.2% (平年27.1%)、払落虫数4.9頭 (平年0.8頭)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 二番茶期に向けた防除対策に重点をおく。

8 ツマグロアオカスミカメ (多)

[予報の根拠]

- 1) 4月中旬の発生面積率46.2% (平年8.2%)、 m^2 当たり被害葉数4.5頭 (平年0.4頭)はいずれも平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 茶以外の植物にも寄生するため、ほ場周りの除草を行う。

9 クワシロカイガラムシ (多)

[予報の根拠]

1) 4月中旬の発生面積率61.5%(平年23.3%)は平年よりやや多、寄生株率32.3%(平年8.2%)は平年より多である。

[防除上の注意]

- 1) 第1世代幼虫の防除適期は幼虫ふ化開始から2週間後、または幼虫ふ化最盛期であるので、ふ化状況をよく観察し防除する。
- 2) 薬剤散布は量を多めに(10a当たり1,000リットル)、枝幹に十分かかるように行いに行う。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
農林水産消費安全技術センターホームページ
(旧 農薬検査所) <http://www.acis.famic.go.jp/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤(商品名、マリックス乳剤、粒剤等)は使用しないこと。
- 3 発生量(程度)の区分
多 い (高 い) やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い (やや高い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない (やや低い) 平年並の外側20%の度数の入る幅
少 ない (低 い) やや少ないの外側10%の度数の入る幅
(平年値は過去10年間の平均)
- 4 予察情報の種類
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
 - 1) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
 - 2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
 - 3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
 - 4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
 - 5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ(<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【文書取扱】	ウラ
病害虫防除・肥料検査センター	生頼
TEL:0985-73-6670	FAX:0985-73-7499
E-mail: byogaichu-hiryo	
	@pref.miyazaki.lg.jp